



地域とともにある学校づくり ～『地域と学校で育つ飯岡っ子』～

旭市立飯岡小学校校長 宇野 けんいち

1 はじめに

本学区は、九十九里浜の最東北端に位置し、豊かな大地と海に恵まれた旭市の南東エリアにある。特に農業では千葉県を代表するメロン産地であり、また飯岡漁港は県内で上位の漁獲量を誇っている。本校は、校舎から雄大な太平洋を見渡せる九十九里浜の沿岸部に面した平坦地に立地し、海岸の堤防から校門まで約250m、海拔6.7m地点にあり、国内でも海岸からとても近い位置にある学校といえる。

2011年（平成23年）3月11日の東日本大震災では、大津波により多数の家屋が倒壊、人命が失われるなど、この旭市においても甚大な被害が発生した。被災当時は、学校の一部を避難所としてその年の5末日まで開放し、3か月余り避難所としての機能を果たした経験をもつ。

2 コミュニティ・スクールの導入

今年度より旭市では、市内全小中学校20校でコミュニティ・スクール（学校運営協議会）と地域学校協働活動が導入された。

本校は昨年度まで市内のモデル校に指定されており、その実績をふまえ、今年度の学校経営のグランドデザインに、新たに『地域と学校で育つ飯岡っ子』をスローガンとした。

現在、コミュニティ・スクールと地域学校協働活動の一体的推進は、本校の学校経営の「地域とともにある学校づくり」の重要な核となっている。

3 地域の人的・物的資源は学校の宝

地域人材や団体を生かした本校の教育実践について、代表的な実践を紹介していきたい。

(1)防災教育における「出前授業」

本校は震災を機に、より一層の地震・津波に関する防災教育の実践を重ねてきた。平成25年には、防災教育において千葉県知事表彰を受賞し、今日まで防災教育は本校の特色ある教育実践として受け継がれてきている。

この防災教育の縁あってか、令和6年7月5日（金）に、台湾台北市防災教育視察団（15名）の訪日において、旭市が視察地に選ばれ、旭市防災資料館と本校を訪問視察することとなった。そこで、公開授業では、ゲストティーチャーとして、有志団体「iii（トリプル・アイ）project」に出前授業を依頼した。

この団体は、震災当日、卒業式を直前に控えた中で被災した地元中学校出身者と市内の同学年の仲間達で結成したボランティア団体である。旭市内の小学校を中心に、被災体験を語り継ぐ防災教室を実施している。

この日の防災教室は、児童にわかりやすく当時の被災状況の伝承や手作りのハンドブックを活用した地震に関する防災クイズ、被災時に役立つ防災グッズ作り（ポリ袋で作るレインコート）の体験活動を展開した。この模様は、NHK 首都圏ニュースや千葉テレビ、複数の



出前授業での防災グッズ作り

新聞社等で報じられ、視察団の方々には大変好評であった。本校卒業生を活用した特色ある取組といえる。

(2)ふるさと教育における「出前授業」

ここ飯岡地区には、ふるさと教育で伝えていきたい地域の貴重な歴史的景観がある。

それは、飯岡海岸護岸工事竣工記念に建立されたアーチ状のモニュメントであり、このてっぺんには二人の少年が配置され、石を積み上げている姿がある。この少年達は、昭和7年に当時の本校第24代校長の鈴木保司氏（中村六三郎のペンネーム）が著した「我らの波止（はと）」に記されている。（詳細については飯岡小HPに掲載）

<http://www.edu.city.asahi.chiba.jp/es-iioka/wareranohato.pdf>

昭和初頭に当時の飯岡小の児童が、波の浸食の防波のために、海岸の「飯岡石」を毎日地道に運



飯岡海岸のモニュメント

び積み上げ、波止を築き、この献身的な活動が、飯岡小全校の取組へと広がり、さらに護岸に対する熱意が町、県を動かし、海岸整備事業への後押しとなった実話である。本校では、防災教育とふるさと教育の学習で毎年、飯岡地域の歴史に詳しい防災伝承語り部の方（旭市防災資料館職員）を出前授業に招き、郷土愛で苦難を撥ね退けた強い精神と防災への熱い思いを児童に伝えていただいている。

(3)人的・物的資源のネットワークづくり

本校では、地域資源（人材、自然、産業）を最大限活用した独自の取組がある。一つ目は、地元の産業を理解するキャリア教育とふるさと教育とを関連づけた海洋体験学習である。地元遊漁船組合の協力を得て、船上から

眺める刑部岬から屏風ヶ浦に至る壮観な地形と雄大に広がる海原と青空の美しい景色は、海に恵まれた郷土に誇りをもつ心を育むには最良の素材であり、また遊漁船での釣り体験により、海洋レジャーの魅力と海に関わる職業観を広げることにもつながった。

二つ目は、旭市小学校音楽会発表に向けた音楽の授業にあたり、地元在住の音楽家をコーディネーターとして外部講師に招いて、専門性と創意工夫を凝らした指導助言をいただいている。これら二つは、飯岡小ならではの学校自慢の活動であると自負している。



海洋体験学習



音楽会でハンドクラップ

4 おわりに

今年度の取組は、これらの他にも新たに、飯岡地区社会福祉協議会と連携した老人クラブとの地域交流会や生活科の「昔の遊びをしよう」での高齢者の方々との授業ボランティアでの交流、そして、地域づくりの児童参画の一つとして「認知症サポーター小学生養成講座」などを加え、実施している。

また、過年度から継続してきている町探検での市内企業の協力、飯小フェスティバルでの地域伝統文化の発表（地域住民と児童の共演によるお囃子）、地域ボランティアによる家庭科の裁縫や調理実習補助、朝の読書タイムでの読み聞かせと、地域の方々や各団体に色々な形で教育活動に参画いただいている。

今後も『地域と学校で育つ飯岡っ子』の目標を共有し、チーム学校の緩やかなネットワークとして連携・協働することで、子供たちに多様な学びの機会を提供していきたい。



地域とともに未来を切り拓く生徒の育成 ～地域人材の活用から未来を考える取組～

東庄町立東庄中学校教頭 藤田 伸平



1 本校の概要

本校は、千葉県北東部に位置し、農業を中心とする人口約1万3千人の地域にある。生徒・保護者は、温かな気質であり、地域の農村によくある「おらが学校」という雰囲気を持っている。そのため、学校運営に対してとても協力的である。学校評価においては、多くの項目で90%以上の保護者が学校運営に「肯定的」である。

生徒数は263名で、部活動や学習に意欲的に取り組んでいる。学習面では、表現活動や記述式問題などに課題がある生徒が見られる。

目指す生徒像として、「主体的に考え、行動し、課題を解決する生徒」「思いやりのある美しい心を持つ生徒」「健やかな体の育成に取り組む生徒」を掲げ取り組んでいる。

2 地域人材活用の状況

本校では、様々な教育活動の中で、地域の方々の協力を得ながら学習活動を進めている。また、昨年度から始まった町小中学校コミュニティ・スクールでの話し合いの場で新たな取組も進めており、この地域人材との連絡・調整は教頭をはじめ、学年主任、学校コーディネーターが協力しながら進めている。

主な活動は次のとおりである。

(1)キャリア教育での連携

地域人材を学校へ招聘して実施する1・2年生対象の「夢授業」という授業では、「短時間（移動時間の削減も含め）で職業を知る

ことができる、多種の職業を知ることができる、体験できない職業にも触れることができる」など、多くの利点が見られる。

また、2年生においては、この講話の前段で、隣接地域の専門学科や職業コースをもつ高校を中心とした紹介授業を展開していただき、高校進学からその先の就職に向けた、つながりのあるキャリア教育を行うことで、将来についての疑問や不安を払拭させるとともに、進路へのよりよい意識付けとなっている。



写真1 夢授業の様子

(2)日本文化体験での連携

3年生の総合的な学習の時間では、地域人材を活用して、日本文化体験を実施している。この日本文化体験では、日本独自の伝統文化について、長年経験を積んでこられた講師の指導のもとで体験を通して学び、理解を深めさせることを目的に実施している。「日本文化」を意識し、書道・茶道・華道・弓道・将棋・舞踊・琴・和菓子・囲碁・空手などを2日間で4時間の授業展開を実施している。生徒は、この活動を通して、文化体験だけでなく地域の方々とのふれ合いや交流にも深まりが見られるようになった。

(3)環境教育での連携

「利根川水域」の環境保全学習として、野生生物（野鳥）の保護（特に町の鳥：コジュリン・オオセッカ）を目的とする生物保護学習と「葦（よし）焼き」体験を実施、広大な地域の葦焼き体験を行うことで、野生生物の保護の重要性を知ることができた。また、この葦焼き体験の前に刈り取った葦を使って、茅葺職人の方の指導の下、「葦簀（よしず）作り」を行った。これらの活動を通して、絶滅危惧種のコジュリンやオオセッカの生息する利根川の自然を守っていこうという気持ちを強くもつことができたと感じる。



写真2 野鳥観察の様子

(4)乳幼児ふれ合い体験での連携

町子育て支援センターと共同で、3年生を対象に実施しているこの体験学習は、技術・家庭科（家庭分野）の保育学習の一環として、生徒が乳幼児と直接関わる活動である。乳幼児に触れる機会の少ない生徒にとっては、この体験を通して、命の大切さや思いやり、親としての役割や子育てについて考えるよい機会となり、子育ての大変さや大切さを学ぶことができた。



写真3 乳幼児ふれ合い体験の様子

(5)ドローンによる見守り活動での連携

学区内の旧小学校跡地で活動している「国際ドローン協会」の協力で、月に1回程度、生徒の下校時間に合わせて、ドローンによる見守り活動の実証実験を今年度より行っている。この活動のメリットとして、生徒の安全が確保できる（ドローンは高所から広範囲を見渡すことができるため、交通事故や危険な状況を早期に検知できる）ことや防犯効果に役立つ（ドローンの存在が犯罪者を威嚇し、生徒の安全を守るための抑止力になる）こと、また、教職員の負担の軽減（下校時の見守りを校内のモニター等で確認できる）などがあげられる。まだ検証の段階ではあるが、これが実際に運用されれば、職員の業務改善に大きく役立つと思われる。

3 地域連携を進める上での課題

多くの場面で地域や保護者からの協力を得ることができているが、日本文化体験のように長きに渡り行っている行事については、講師の高齢化が進み、依頼の継続が難しくなっている。また、行事が増えれば職員の業務も増えてしまうことになるので、内容の見直しや新たな人材の確保、地域人材との連携・調整を考えていく必要がある。

4 おわりに

生徒数の減少により様々な課題が生じている。そのため、地域の人材や行政機関等の協力・支援がなければ学校運営が難しくなっているが、学校の現状を伝え、地域の方々に理解していただきながら連携や協力体制を築いていくことは、教頭の大きな役目だと考える。今後も、教頭として工夫・調整しながら、生徒により多くの体験や効果的活動を実施することができるよう進めていきたい。



学校教育目標の達成のため、教務主任にできること ～「みんなで学び、みんなで励み、みんなで伸びる」 チーム辰東の取組～

市原市立辰巳台東小学校教諭 おまる なおや 小丸 直也



1 はじめに

本校は、市原市北西部のなだらかな丘陵地帯に位置し、住宅地や商業施設とともに自然にも囲まれた豊かな環境にある。全校児童は約400名で、地域の方々や保護者の協力のもと、明るく元気に活動に取り組んでいる。

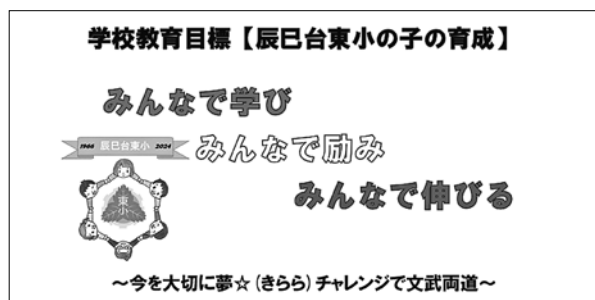
現在、本校に勤務して3年目、教務主任としては6年目となる。教務主任としての責任とやりがい、時代の変化に対応した教育活動を展開していくことへの難しさを感じながら、日々試行錯誤し業務にあたっている。

ここでは、「学校を動かす」ために教務主任として私が取り組んできたことを紹介する。

2 児童の幸せ＝学校教育目標の達成

学校全体の目標や方向性を明確にするため、第1回職員会議では、全教育活動が学校教育目標達成のためにあることを確認する。

児童の成長にとってよりよい教育活動が実施されるよう職員の思考のベクトルが明確になっている。



(職員室に掲示中の本校の学校教育目標)

3 ミドルリーダーとしての役割

管理職と教職員との情報交換が円滑に進む

ように、常日頃から職員とのコミュニケーションを心がけている。心境や業務の進行状況、教育活動における悩みなどを聞き出し、知り得た情報を管理職へ迅速に報告するよう努めている。職員会議等では、事前に提案内容の修正点を確認したり、対応策を練ってから会議に臨んだりして、会議及び教育活動がより充実するよう努めている。

また、授業における指導のポイントや有効な手立て等を確認したり、職員間での相互参観を設定したりしながら、授業力向上と指導力の高め合いに力を入れている。

4 若年層教員の能力開発を目的とした校務分掌の体制づくりと行事運営

本校の職員層は、その半数以上を若年層教員が占めている。校務分掌の多くや各行事のリーダーを若年層教員が担当し、ベテラン教員のサポートを受けながら分掌業務や各行事の運営を行っている。各行事の方向性を決定するための企画会議（主任会議）にも、提案者として若年層教員が積極的に参加するとともに、建設的な話し合いが行われ、若年層教員の資質・能力開発のための良い機会となっている。

5 業務能率化のための5つの取組

(1)情報伝達ツールの活用率100%

職員のICT端末にあるTeamsの投稿及びチャット機能を利用し、資料を添付して周知したり、担当ごとにチャットグループを組んだりして情報を共有している。業務に必要な

時間が短縮され、行事準備や児童への指導の時間確保に繋がっている。

保護者の欠席連絡とも連携して、欠席・遅刻・早退等の情報を確認することができる。電話連絡で受け付けた内容等も関係職員に知らせることができる。

児童と教員の情報伝達も上記のように行っている。授業計画や行事内容、週予定等を児童に向けて知らせるツールとしても有効である。また、アンケート回答やオンライン授業への参加等、今後も使用方法を改善しながら利活用していく。

(2)会議・打合せ時間の短縮化と効率化

職員会議や打合せ、学年会等、様々な機会にも Teams を活用して、資料の変更点や修正箇所をリアルタイムで確認し、編集や検討に役立てている。ペーパーレス化とともに、職員会議は30分間、打合せは15分間程度で終了することが可能になっている。



(Teams チャンネルに投稿している会議資料)

(3)AIドリルの活用

全学年で統一したAIドリルを採用している。漢字の書き順や計算の順序、答えの導き方等、採点基準を担当が設定してAIに採点させることができる。予習や復習、宿題等の点検に費やす時間を大幅に削減した。

児童も楽しみながら積極的に活用している様子が見られ、学習理解を深めるための良いツールとなっている。

(4)アナログ資料のデータ化と共有

アナログの資料もデジタル化し、職員全員がクラウド上で共有できるようにした。

①特別教室割り当ての変更と予約

- 職員室黒板に手書きだったものをデータファイルにして共有

②補教計画表

- 手書き提出をデータ化し、チャットに添付して提出するようにした。

③生徒指導・教育相談等の記録

- データファイルで共同編集化した。

④週案のクラウド化

- 各々で作成してした週案作成を、クラウド化し、専科・少人数教員と共同編集できるようにした。

上述の他にも、週報や月予定表、動静表や提出書類等をクラウド化することにより、余計な集約や印刷を省略することができる。

(5)職員の業務時間を確保・支援する

「学校を動かす」ためには、どれだけ職員が動ける時間を確保したかが重要になるため、以下のように支援体制を組んだ。

①クラブ・委員会・会議日課の設定（短縮）

②業務改善日の設置（行事前・通知表期間）

③学校支援ボランティア、学習サポーター、

スクールサポートスタッフの有効活用

④外部講師を取り入れた部活動指導

⑤休業中のコンクール精選（個人で応募へ）

⑥空き時間を確保し、事務作業時間を拡大

職員が活用できる時間の増加は、より充実した教育活動の実施に結びついている。

6 おわりに

今後も、「チーム辰東！」を合言葉に職員が一丸となり、児童の成長のため教育活動に全力で取り組んでいきたい。



わくわくする理科授業を目指して

船橋市立船橋中学校教諭 **井上 華恵**



1 はじめに

「なぜ?」「やってみよう!」をモットーに、自然の理(ことわり)を学ぶ。生徒と共有している授業の軸だ。「楽しそう、やりたい!」そう思えるような授業を創ることで、内発的動機を促し、生徒の力を伸ばしたい。「知らなくても分かる、知っていてもおもしろい!」全ての授業が、生徒にとってそんな時間であるように、日々実践している。

2 実践例

(1)導入で単元に命を吹き込む!

「この単元が楽しみだ!」そう思えるように、最初の授業ではリフレクションシート(図1)などを用いて、単元についての「なぜ?」を共有している。生物や地学は、生徒がイメージをもちやすいので、単元の内容に沿った疑問が出てきやすい(図2、左)。化学や物理など、イメージをもちにくい単元では、全体で現象等を確認してから、疑問探しをする。1年化学では地元の『ごみの分別ガイド』を配付して物質の性質に注目がいくように、3年化学では乾電池を観察して“アルカリ”“水溶液”などのキーワードから「電池のしくみ」に迫れるようにする(図2、右)。



図1 単元ごとにつかうリフレクションシート

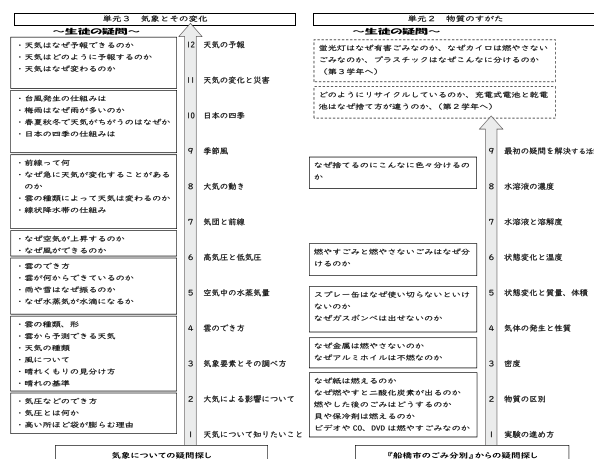


図2 生徒の疑問と単元の流れ

そうして出てきた各自の疑問を共有し、その後の授業の小課題(図3)でなるべく回収していくことで、少しでも“自分事”として、課題を捉えられるようにしている。また、単元の学習をしていくほど最初の疑問に迫り、内容が深まっていくようなストーリーを設定することで、生徒は見通しをもちやすくなり、こちらも、次の内容に関連する部分を強調するなど、伏線が立てやすくなる。

- 課題1 電池に必要なものは何だろうか?(キーワード: **水溶液**と**2種類の金属**)
 課題2 **水溶液**と**電流**にはどのような関係があるのだろうか?
 課題3 電解質の**水溶液**にはなぜ**電流**が流れるのだろうか?
 課題4 **金属**の種類によってどのような違いがあるのだろうか?
 課題5 電池はどのようにして電気エネルギーをとり出しているのだろうか?

図3 小課題の例(3年化学)

雰囲気づくりも大事にしている。例えば3年地学では、初回の授業で人々が天体の観測から方角や季節を読み解いてきたという詩を読みあげ、掲示物にしておく。理科室は暗幕を閉めることで宇宙を演出し、天球儀や天体望遠鏡などを出しておく。部屋に來ただけで、宇宙モードになれる仕掛けだ。

(2)理科の強み、実物を生かして

理科の強みは、何といっても“物”を扱えることだと思う。毎時間、何か必ず教材を用意するようにしている。何やら道具が準備されている、先生が何かを持って来た…それだけで生徒のわくわく度が高まる。可能な限り実物を用意する。実物が難しい単元も、なるべく体感できるような工夫をする(図4)。画像の場合も、身近に感じてもらえるようになるべく自作のものを使う。前日に、校庭で撮影した金星の写真などだ。(特に、金星との自撮り写真は生徒受けがよい。)併せて授業の度に「昨日は星を見ましたか?」と聞き続けることで、「先生、昨日オリオン座が見えましたー!」「星の写真がきれいに撮れました!」という生徒がでてくる。物理の時間も、ボールをひとつポケットに忍ばせれば、色々なことができる。「やってみよう!」のモットーは何より自分が率先して貫くようにしたい。



図4
壁面に星座を貼り、
教室全体を天球にする

(3)わかる、できるからおもしろい!

生徒がノートやレポートを書いている時間は、決めたルートで全員の近くを通れるように机間をまわる。近くに行くと質問してくれる生徒がいる。手が止まっている生徒がいたら、こちらから声をかける。共有の時間も大事にしている。「仮説こうなるよねー?タイム」や、「結果からこんなことが分かるよねー?タイム」と称して、自由に相談できる時間をとる。状況によっては立ち歩きも許可する。自由に学び合い、不安を取り除く時間だ。「ああ、そういうことか!」「なるほどー!」というやりとりが自然に出てくるように、私自身も話合いに参加しながら導いていく。授業アンケートから、「話合い活動をするとうっかりやすい」と答えた生徒が89.7%だった。

レポートには、赤ペンでサッと添削し、次の時間には返却する。生徒は写真を撮ってロイロノートに提出。提出箱に画像があるので、時間がある時にまとめて転記でき、こまめな形成的評価にもなる。今のところ最も時短で効率がよい方法だ。レポートにはループリック(図5)を示し、生徒に基準を示しながら、こちらも評価がぶれないようにする。生徒の理解度を知ることができ、こちらもすぐに次の指導に生かすことができる。

物理 NO. () 月 () 日 () 年 組 番 氏名		NO. () へのプリントが分かるように書いておこう! 月 () 日 ()	
酸性・アルカリ性の正体		結果> (事実を基にまとめてみよう! 気づいたこともメモしよう!)	
目的> (どのような疑問を解決したいのかはっきりさせよう!)			
仮説> (どう確かめる? どのような結果が考えられる? 検証は?)			
わたしの考え	参考になった考え		
その根拠		考察> (結果から分かることを書こう!)	
準備>			
方法>			
<ループリック> B 酸性・アルカリ性を示すものが何かを考えている A 根拠を元に酸性・アルカリ性を示すものが何かを化学式を用いて述べている			
ループリック> (酸性・アルカリ性を示すものが何かを考えている)		振り返り> (自分の取り組みや新たな疑問などを書こう!)	
A (根拠を元に酸性・アルカリ性を示すものが何かを化学式を用いて述べている)		※よく考えてみよう! できたら先生に相談しよう! 結果的に正しいか? A, B, C 結果的に正しいか? A, B, C 結果的に正しいか? A, B, C	

図5 レポートの例 (左下にループリック)

3 おわりに

教員になって最初の頃は、やるべきことに追われて日々を乗り越えることで精一杯だった。そんな中、ずっと譲れないものは理科の授業に対する想いだった。興味のない生徒をどうしたら振り向かせられるか、興味をもっている生徒をどうしたら満足させられるか、必死に考えた。その中で、とにかく自分が真剣にやるという姿勢を意識した。3年生を教えるこの時期には、天体オタクになり毎日空を見上げる。日々の生活が教材研究になる。今、理科室の壁には一面に、黄道十二星座が貼ってある。そして実は、星の部分に蓄光シールが貼ってある。授業中に消灯すると「わあー!」っと歓声があがる。この声を聞くために、これからも私は理科オタクとして一番わくわくしていきたい。



「未来へつなぐ道徳教育」を目指して

横芝光町立上堺小学校教諭 さいとう ゆい 齊藤 優衣



1 はじめに

本校は、学校教育目標を「笑顔いっぱい いきいき学ぶ 上堺っ子 ～学びをつなぐ 心をつなぐ 未来へつなぐ～」とし、令和4年度に「特色ある道徳教育推進校」の指定を受け、道徳教育の研究に努めてきた。全校児童89名の小規模校であり、異学年間、男女間での仲が良く、活発に活動する姿が印象的である。一方で、小さな社会で生活をする児童にとって、固定化された人間関係や人とのつながりの意識の薄さが課題であり、学びをよりよい生き方につなげていくためには、道徳教育の充実を図ることが重要であると感じた。この考えに至ったのは、道徳教育の研究、公開授業がきっかけだった。私が学級担任としてできることは、学校、家庭、地域が協力して、子供たちの道徳性を育むことだと考え、「つなぐ」をテーマに以下の実践に取り組んでいる。

2 日々の実践

(1)道徳科の学習

①書く活動の充実 (ICTの活用)

書く活動の目的は、自己を見つめ振り返り、他者と考えを共有し、自身の思いを学びにつなぐことである。主体的・対話的で深い学びに向け他者と対話をするためには、まず自分の考えをもつことが不可欠であり、その時間を大切にしている。そこで、児童が視野を広げたり、他の考えに触れたりする機会を設けるために、ICTの活用に取り組んでいる。

1人1台端末を活用し、考えを言語化・視覚化することで、様々な考えに触れながら物事を多面的・多角的に考えられる。友達の考えをリアルタイムに確認できるように、共同編集機能のあるアプリの活用や、電子黒板へ児童の思考の経過を提示している。友達の考えを参考にしながら自分の考えを書くことができるため、考えを言語化することが苦手な児童に対しての支援にもつながっている。

②思考をつなぐ板書の工夫

児童が振り返る場面で思考のもととなるのが、板書である。構造的な板書を意識することで、児童が板書を確認し、1時間の学びを振り返りながら、自分の考えをまとめることができる。心情メーターや人物関係図などとともに、児童の発言からキーワードとなるものを色分けし、板書をするよう意識をして取り組んでいる。



③教師の説話

学びを実生活とつなぐために、授業の中に、必ず説話を入れるようにしている。ここで注意をしていることが、担任の考えの押しつけにならないようにすることである。今までの経験の中で、道徳的価値に当てはまる場面、実際に経験したことを児童に伝える。また、導入で活用するアンケートの中に、担任の経

験を取り入れることもある。子供たちにとって身近な大人である担任の体験や説話は、興味関心が高く、道徳心を育む上で、非常に効果的であると感じている。

(2)道徳教育として

①学級通信の発行

学級通信発行の目的は、児童と児童、児童と担任、児童と保護者、担任と保護者をつなぐことである。学級通信を通して、日々の学習内容や児童の学校での姿、様子を紹介し、家庭と共有している。また、道徳科の授業をより生活場面に結びつけるためにも、気になった児童の行動や学級での出来事を取り上げ、保護者に伝えている。担任としてのこだわりは、「手書き」である。それは、感じたことをすぐに伝え、担任自身の想いをより理解してもらうためである。その時々強いメッセージを載せて発行し続ける姿を児童に見せることで、何かを感じ取ってほしいとも思っている。また、子供の実態を家庭に理解してもらうことで、親子の会話のきっかけとして活用してもらうとともに、家庭の教育力向上を図っている。さらに、児童の活躍を載せることで児童の意欲の向上、学校教育への理解を深めることもねらっている。

②学級活動の充実

授業の中で、児童が安心して自己表現をするためには、認め合うことのできる学級の雰囲気が必要である。特に、道徳科の学習では正解は1つではないので、子供たちの多様な考え方を認め合い、受け入れつつ、自分の考えをもつことが大切である。その基盤となるのが、学級経営であると考えている。

そこで、学級活動では児童同士の心をつなぐために児童が自己開示をし、自己理解、他者理解を図ることができる場面を多く設けている。以下の取組の共通ルールは絶対に否定

しないことである。取組の一例を紹介する。

(ア)日記リレー

日直が日記を書いて、次の日直にリレーしつなぐ活動である。その日の出来事で、自分が感じたことや思ったことなどを学級全体に伝えるものである（用紙：10cm×10cm）。その日記を掲示することで、自分の思いを他者に伝えることができる。この日記では、必ず、感想を書くことを意識させている。

(イ)詩の視写

書く活動へつなぐ取組として、児童が詩集を読み、「今、学級に伝えたい詩」を選ばせている。なぜその詩を選んだのかを伝え合う活動を通して、互いの考えを理解し合うことができる。また、その詩を学級全員で音読したり、視写をしたりすることで、自己有用感を高めるようにしている。

3 終わりに

道徳教育の要となるのは、認め合うことができ、安心感のある学級の雰囲気である。その雰囲気を作るために働きかけることが担任としての役割だと感じている。道徳科の学習の中で最も不安に感じる場面が、発問を投げかけた後の「沈黙」の時間である。静まりかえる教室で、子供たちと向かい合う時間は不安が押し寄せ、次の言葉を投げかけたくなくなってしまう。しかし、子供たちにとって「沈黙」の時間は決して無駄ではない。「沈黙」＝「自分自身、教材、問題場面」と真剣に向き合っている時間と考え、担任としても児童の考える姿を認め、傾聴する姿勢を大切にしていきたいと思う。子供たちにとって、保護者よりも長い時間を共に過ごしている担任として、日々の道徳教育の実践を大切にし、学びを未来へつなぐ道徳教育に取り組み、子供たちの成長を支えていきたい。